

「アガベ」(題字・伊藤博胤)

日本社会事業大学  
Japan College of Social Work

# アガベ

日本社会事業大学同窓会北海道支部【(2018年2月2日発行 第21号)】

(事務局・仁木町大江2-457大江学園内 0135-32-3662)

## 初の「同窓会就活フェア」Uターン者

松川真子 (福祉計画学科福祉経営コース4年)

同窓会の就活フェアで進路先を決められましたが…

初めて3年次に就活フェアに参加した時は進路について地元に戻ることにしか考えていませんでした。そこで就活フェアで知った障害分野の「はるにれの里」を春休みに見学させていただいたことがきっかけで進路の選択肢の一つになりました。実際の就活では、東京の法人と地元の函館の法人とはるにれの里に応募し、内定をいただきました。

応募に決め手は？

実習の経験から自閉症と発達障害の支援に関心がありました。就職先のはるにれの里は、この2つに特化した支援をしていることや、研修制度が充実しているため安心して仕事が続けられそうなことから応募しました。そして、同じ職場で活動しているOG・OBがおり、「同窓生の職場で働く」ことにも魅力を感じました。

Uターンを考えている後輩へのメッセージ

Uターンは就職先の見つけ方など不安も多いと思います。だからこそ就活フェアや学生支援課を利用して情報収集や相談をして不安を解消させると良いと思います。また4年生は多忙なので、早めに就職・卒論・国試の計画をすることをお勧めします。

(社大同窓会誌V o 1. 81より転載)

\* なお、帯広慧誠会(村上会長が総合施設長)でも、社大卒の24歳の女性が、この4月から保育部門で働くこととなっており、道同窓会の様々な努力が報われる形となっています！



## 2018年度新春セミナーを開催

年も新たになった1月20日（土）、札幌ススキノの桜彩（さくらいろ）において標記が開催されました。当日の参加者は「懐かしい」メンバーも含め13人。お一人（どなただったんでしょうねえ…）が1週間開催を感違いしていたのはご愛敬、です。

新春セミナーでは例年、冒頭で必ず学習の時間を設けています。今回は、秋季セミナー&日社大市民公開セミナー in 美唄で現地の責任者を務めたTさんが、「日社大同窓会の役割とセミナーの成果を検証する」という報告を行う予定でした。しかし、最近猛威を振るい始めたインフルに遣られてしまい、「外出禁止状態です」（弱々しい声でした）となってしまって、学習会は中止を余儀なくされてしまいました。

早速、定期総会に入り、久々に参加した旭川の安曇さんが「では、私が」と議長に立候補し、金子事務局長が次第に従い、諸報告及び諸提案をしました。また、就活フェアを含むこの間の道同窓会の活動の到達点等については、高田幹事が補足説明を行いました。

これらを受けて、参加者から意見をいただきました。この中では、やはり就活フェアの継続的な取組や他同窓会支部との連携、また、高校生への社大の積極的な売込みや受験のサポート、また、在学生への北海道同窓会等の周知や就職支援などに具体的な提案があり、これらを含めて今年も同窓会幹事会に提案していこうということになりました。

ただ、18年の秋季セミナー&市民公開セミナーについては、十分に詰め切ることが出来なかったため、会長、副会長を中心に今年度中に決定していくこととしました。

以上を含め、議案のすべてについては全員一致で承認されました。この中には、役員改選も含まれており、同窓会活動の強化のため、「若い」年代の人たちの協力も得ることとして、瀬戸さんが副会長に就任したほか、監事や事務局次長の選出、さらにはブロック幹事の補充も行っています。

議事を終え、まず村上会長が挨拶。続いて、村上会長や三上副会長の知り合いである群馬県の小出さんが飛び入り参加してくださり、懇親会が開始されました。

いつも通りの和やかな内容であり、2時間半も経った頃、「それでは」とお開きになったのでした。そして、三々五々、参加者はススキノの街に消えていったのでした。

では次回は、秋季セミナーでお目に掛かりましょう！

### 偉大なる我が師・小川政亮さんを悼む

高田 哲（学部15期卒）

政亮先生が亡くなって、日社大の錚々たる第一世代の恩師たちがみな、この世から居なくなってしまったことを、心から寂しく思っています。

社大生は、師匠たちを「〇〇先生」とは呼ばず、「〇〇さん」と呼び慣らしていま

した。1971年に入学した私も、それに倣いました。そして私は、2年生、3年生と政亮さんのゼミ生でした。

『権利としての社会保障』が政亮さんのゼミ本であり、毎週学生たちがリポートをしていたはずなのに、ゼミの多くの時間は政亮さんの「解説」であり、それがとても難しかったことを覚えています。また、社大の第一世代の恩師たちは、学生が「さん」付けで呼ぼうが、ゼミを出たり入ったりしようが、常に春風駘蕩然としていました。結果、卒業し社会に出たのちになってから始めて、「本当に偉い人は、自分のことを『偉い』とは決して言わないものだ」ということに気づかされたのでした。

社大の恩師たちは、卒業後も、学生の名前をきっちり覚えていて、お目にかかる機会があると、「おお高田君、元気で遣っているか？」とか、「ケースワーカーの仕事はどうだ？」など、現在の仕事内容をもお知りになって話しかけてくださいました。

卒後、生保のワーカー歴が長かった私は、政亮ゼミであることを「利用」して、政亮さんによく北海道に来ていただきました。いつも「お願いします」と電話をしただけで、「解ったよ」と来てくださったのです。

お出でになる時は、ご自分で飛行機の切符をお取りになり、飄々として新千歳空港に降り立つのです。あるときは、長靴を履いて、蝙蝠傘を持っての来道でした。

「小川先生」といえば、社会福祉の世界では伝説的な方ですから、懇親会などでは様々な人が名刺を持って、師匠に挨拶に来ます。私は政亮さんの隣りに立っていて、師匠の秘書役をしていたものです。「〇〇と申します」と先方が挨拶すると、政亮さんは名刺を丁寧に受け取りながら、「小川です、これからもよろしくお願いします」とお礼をするのが常でした。

またある時、空港から会場までの車移動を学生さんをお願いしました。イベント終了後に、その学生あてに丁寧なお手紙と共に御本を送ってくださったのです。学生は大感激。「一生の宝にします」と云い、彼女は卒後はMSWになりました。

政亮さんとは、年に1回の年賀状の遣り取りが基本でした。今年の年賀状は、お名前の判子を押すのがズレたせいで、「亮」の字が葉書からなくなっていました。でも、「政亮さんらしいなあ」と思いつつ、書いてくださったメッセージを何度も読み直して、師匠のありがたさを満喫していました。

そして連休明け、社大より「たった今、連絡が入りました！」と、ご逝去の報告をもらいました。97歳ですから、大往生です。あるときの講演会で、「政亮先生は御年（おんとし）85歳になられます」と紹介したとき、「高田君、まだ84歳だよ」とおっしゃったことを思い出しました。

政亮さんを始め、社大の恩師たちのことを語れば、切りがありません。1971年からの4年間で、私はこうした恩師たちと共に、日本社会事業大学で過ごさせていただいたのです。本当に有り難い、の一言に尽きます。

政亮さん、ありがとうございます。師の歩んできた道の一部であっても、私は師の後を歩み続けたいと考えています。我が師匠、これからも何とぞ、よろしくお願いします。  
(追悼文集より転載)